

18世紀書簡体小説における読書と再創造：マリヴォーの『マリヤンヌの生涯』とリコボニ夫人によるその『続編』

著者	遠藤 真人
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	2
ページ	79-96
発行年	1994-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/34416

18世紀書簡体小説における読書と再創造

— マリヴォーの『マリヤンヌの生涯』とリコボニ夫人によるその『続編』 —

遠 藤 真 人

はじめに

マリヴォダージュ *marivaudage* という言葉に象徴されるように、マリヴォー *Peirre Carlet de Chamblain de Marivaux* (1688-1763) の作風は、心理の微細な働きを、きわめて精緻な洗練された文体で描いたものとして知られる。そもそも、マリヴォダージュという言葉は、とりわけマリヴォーの文体に対してむけられた非難であった。マリヴォーの敵たちは、マリヴォーの文体は、「回りくどい」「気取った」「持って回った」ものであると非難したのである⁽¹⁾。

けれども、マリヴォーを認める者にとって、マリヴォーの作風、とりわけその文体は模倣を許さないと考えられていた。『パリ論』 *Essais sur Paris* や『神託』 *Oracle* の作者として知られるサン・フォワ *Saint-Foix* (1698-1776) も、当時このように考えていたひとりである。ところが、サン・フォワの言葉を聞いたリコボニ夫人 *Madame Riccoboni* (1713-1792) は、マリヴォーの作品『マリヤンヌの生涯、或は***伯爵夫人の冒険⁽²⁾』(以下『マリヤンヌの生涯』もしくは *La vie de Marianne* と略記する)の続編を書くことを試みた。『マリヤンヌの生涯』最終第11部刊行から10年を経た、1751年のことである⁽³⁾。

不可能とされていた試みは、マリヴォーも含めて、当時の人々から異例ともいえる高い評価を受けた。佐藤文樹による調査をもとにしてまとめれば、当時の主な評価は、おおよそ以下のとおりである。

「マリヴォーの手法の完璧な模倣である。しかも、マリヴォーよりもずっと趣味がよい。」この評価は、マリヴォーを好んでいなかったグリム *Frédéric Melchior Grimme* による(『文芸通信』 *La Correspondance littéraire*)。

「リコボニ夫人は、[……] 作者の文体を模倣した。だれもおそらくこれ以上、模倣というものを推し進めることはできないだろう。」ダランベール *d'Alembert* (『マリヴォー讃』 *Eloge de Marivaux*)。

「模倣は完璧であり、味わいとすばらしい繊細さを示している。[……] これは実に快い精神の遊戯である。」ジュリア・カヴァンナ *Julia Kavannagh* (『フランスの女流作家』 *French women of letters*)⁽⁴⁾。

他者のテキストを模倣して書き継ぐという行為は、クリステヴァが論じているように、そのテキストを機縁とし、素材とすること、つまりプレテキストとして定立し、そこから新たなテキストを織り出すことである⁽⁵⁾。さらに、ある主体による読書が、その主体によるテキスト生産の過程であるとすれば、リコボニ夫人による『マリヤヌの続編⁽⁶⁾』（以下『続編』もしくは*Suite*と略記する）は、リコボニ夫人がマリヴォーのテキスト『マリヤヌの生涯』を読む過程で生産し、獲得したものの「引用」と「変形」からなるモザイク状の再生産・再創造の結果にほかならない。つまり、ここにみられるのは、18世紀中葉のフランス上流社会における「プレテキスト」／「テキスト」あるいは「生産行為としての読書」／「再創造」という問題領域である。本稿では、この問題領域を考察するために、『マリヤヌの生涯』と『続編』を比較考察する⁽⁷⁾。両者を比較考察することによって、18世紀中葉のフランス上流社会の、ある女性の読書過程と再創造の一端を明らかにすることができると考えられるからである。

1. 読書過程 模倣 メタ・テキスト

「リコボニ夫人は、[···] 作者の文体を模倣した。だれもおそらくこれ以上、模倣というものを推し進めることはできないだろう。」ダランベールをこう言わしめた、模倣という問題領域は、リコボニ夫人が読書をする過程でマリヴォーの文体をどのように読みとったかという問題領域に緊密につながっている。

厳密に考えれば、模倣が再創造である以上、模倣されているものと模倣したものが同一であるとは考えられない。また、読書過程そのものを、つまり読書している精神の働きそのものをとらえることは原理的に不可能であろう。けれども、模倣はそれに先立つ読書行為をもとにしてなされなければならないのであるから、逆に、模倣が完璧であればあるほど、模倣を手がかりにして読書行為を知る可能性が高いといえる。

ただし、本稿では『マリヤヌの生涯』と『続編』における、文体の面におけるマリヴォーダージュの具体的な比較考察はおこなわない。周知のことであるが、この問題は心理のとらえかたとしてのマリヴォーダージュと密接な関係にある。したがって、まずマリヴォーにおける文体・心理把握の統一体としてのマリヴォーダージュを明らかにしなければならない。その後にはじめて『マリヤヌの生涯』と『続編』における文体・心理把握の統一体としてのマリヴォーダージュの比較考察がなされなければならない。このような事情から、本稿ではまず次のような『マリヤヌの生涯』最終第11部と『続編』の冒頭の一部を考察する⁽⁸⁾。

Il me semble vous entendre d'ici, madame : Quoi! vous ériez-vous, encore une partie!
Quoi! trois tout de suite! Eh! par quelle raison vous plaît-il d'écrire si diligemment

l'histoire d'autrui, pendant que vous avez été si lente à continuer la vôtre?

(*La vie de Marianne* Partie 11, p.539. 下線は論者による。)

Vous voilà bien surprise, bien étonnée, madame : je vois d'ici la mine que vous faites. Je m'y attendais : vous cherchez, vous hésitez ; il me semble vous entendre dire : Cette écriture est bien la sienne, mais cela ne se peut pas, la chose est impossible! — Pardonnez-moi, madame, c'est elle ; c'est Marianne, oui, Marianne elle-même. — Quoi! [...].

(*Suite* p.585. 下線は論者による。)

出典を知らないで読まなければならないとすれば、どちらの引用が『マリヤンヌの生涯』からのものであり、どちらが『続編』からのものであるかを言い当てるのは困難であろう。すくなくともこの部分の模倣は、先に見た当時の人々の感想のように、「完璧」であるような印象をあたえる。

その理由として、まず《Il me semble vous entendre》《d'ici》《madame》《Quoi!》などは双方に用いられており、語彙、表現のレヴェルでの共通性がみられることがあげられる。けれども、さらに重要なことは、これらの語彙、表現は相同的 homologique な用い方をされていることである。

「模倣されているテキスト」と「模倣しているテキスト」のあいだに、語彙、表現のレヴェルでの共通性があるだけでは、「模倣」であるとはいえない。風刺やパロディーの場合にも語彙、表現のレヴェルでの共通性が当然みられるからである。

パロディーにおいては、「パロディーされているテキスト」のなかで、たとえば崇高な表現価値を担っている表現は、「パロディーをおこなっているテキスト」では、滑稽な表現価値を担わされる。滑稽な表現価値が生じる源泉は、「パロディーされているテキスト」において崇高な表現価値を担っている、「パロディーをおこなっているテキスト」と共通の表現である。つまり、「パロディーをおこなっているテキスト」と「パロディーされているテキスト」の共通の語彙や表現は、通常その機能が逆転している。これに対して、「模倣」の場合、このような転倒は起きてはならない。

「模倣」をこのようにとらえたうえで、『マリヤンヌの生涯』と『続編』における「模倣」の問題を詳しく検討する。先の引用において、『マリヤンヌの生涯』と『続編』では、以下の点が共通している。

《me》は発信者、つまり『マリヤンヌの生涯』を友人の某夫人に書き送っている、声としての登場人物、マリヤンヌである。これは、物語のなかのマリヤンヌとは峻別されなければならない。《vous》は、発信者、声としての登場人物であるマリヤンヌと対をなす受信者、つまり、書簡(手記)『マリヤンヌの生涯』を受け取っている、声としての登場人物、某夫人である。《d'ici》は

発信者、声としての登場人物マリヤヌが、この『マリヤヌの生涯』を書き送っている時間・空間を指示している。《madame》は、某夫人を指している。《Quoi!》は、直接話法による某夫人の驚きの声である。

以上のような共通点にくわえて、『マリヤヌの生涯』と『続編』には、さらに次のような共通点がみられる。発信者マリヤヌは受信者と異なる時間・空間にいる《d'ici (*La vie de Marianne*) (*Suite*)》にもかかわらず、受信者の反応をまのあたりにしている《Il me semble vous entendre (*La vie de Marianne*) (*Suite*)》。この想像力は、呼びかけ《madame (*La vie de Marianne*) (*Suite*)》から、さらにすすみ、受信者の反応を直接話法で示すこと《Quoi! vous écririez-vous, encore une partie! [...] (*La vie de Marianne*)》《Cette écriture [...] impossible! (*Suite*)》によって、ついにはテキストの中で実際の対話を成立させるにいたる。

つまり、共通の語彙、表現は、相同的な用い方をされており、『続編』は『マリヤヌの生涯』のテキストの構造を踏襲している。比喩的に表現すれば、『マリヤヌの生涯』から『続編』へ、いわば「平行移動」がおこなわれているのである。

さらに、この『マリヤヌの生涯』から『続編』へのテキストの「平行移動」は単なる「平行移動」ではない。『続編』のテキストは、『マリヤヌの生涯』のテキストの解釈である。

「模倣」にふさわしく、『マリヤヌの生涯』のにおける「ここからあなたの声が聞こえるような気がする」《Il me semble vous entendre d'ici (*La vie de Marianne*)》という箇所は、『続編』において、ほぼそのまま引用のかたちで《il me semble vous entendre dire (*Suite*)》と理解されている。けれども、『続編』ではさらに、『マリヤヌの生涯』のこの箇所が含意しているのは、「ここから」《d'ici》相手の表情が見えるということでもある、すなわち《je vois d'ici la mine que vous faites. (*Suite*)》ということであると解釈されている。「ここから聞こえるような気がする」《Il me semble vous entendre d'ici (*La vie de Marianne*)》から「ここからあなたの表情が見える」《je vois d'ici la mine que vous faites. (*Suite*)》へと、発信者マリヤヌの想像力によって現前している受信者の反応は、敷衍して解釈されているのである。

すなわち、『マリヤヌの生涯』における、「ここからあなたの声が聞こえるような気がする」《Il me semble vous entendre d'ici (*La vie de Marianne*)》という箇所と、某夫人の生の反応である言葉《Quoi! vous écririez-vous, encore une partie! (*La vie de Marianne*)》という直接話法がもたらす受信者の現前性は、『続編』においては《Il me semble vous entendre dire (*Suite*)》に加えて、「ここからあなたの表情が見える」《je vois d'ici la mine que vous faites. (*Suite*)》という解釈と、『マリヤヌの生涯』と同様の直接話法がもたらす某夫人の反応の現前性《Cette écriture est bien la sienne, mais cela ne se peut pas, la chose est impossible! (*Suite*)》として解釈し直されている。『続編』の言葉は、『マリヤヌの生涯』を解釈しているメタ言語として機能しているのである。したがって、『続編』は、リコボニ夫人が読むことによって生産している『マリヤ

ンヌの生涯』というテキストの相関体、換言すれば『マリヤンヌの生涯』のメタ・テキストになっていると考えることができる⁽⁹⁾。

2. プロット

本稿で論じている意味での「模倣」の場合、登場人物の関係も含めて、模倣されているテキスト『マリヤンヌの生涯』のプロットは、模倣しているテキスト『続編』によって矛盾することなく、正確に引き継がれなくてはならない。『続編』における『マリヤンヌの生涯』のプロットの引き継ぎ、換言すればリコボニ夫人による『マリヤンヌの生涯』のプロットの把握は、『マリヤンヌの生涯』でプロットにそって並べられている出来事が、『続編』に組み込まれていることや、直接的に言及されていることによって確認することができる。これは『マリヤンヌの生涯』と『続編』における様々の出来事を、プロットを軸として記述した対照表を作成することによって確認できる性質の事柄であるが、本稿では一例をあげるにとどめる。

Ma mère, vous reverrai-je [=Marianne] bientôt? lui [=à Mme de Miran] dis-je.
Demain dans l'après-dînée, me répondit-elle en m'embrassant ; et nous nous quittâmes.
(*La vie de Marianne* Partie 8, p.425.)

Je [=Marianne] devais voir Mme de Miran le lendemain, comme je vous [=à la destinataire] l'ai dit. (*Suite* p.589.)

引用では、『マリヤンヌの生涯』第8部でなされたマリヤンヌとその庇護者ド・ミラン夫人 Mme de Miran が会う約束について、『続編』で言及されている。この《je vous l'ai dit》「わたしがあなたにそのことを言った」という時点を現実のなかに置いてみると、『マリヤンヌの生涯』最終第11部刊行から10年後のことである。また、『マリヤンヌの生涯』のテキストでいえば、最終ページから実に157ページ前、つまり第9部から第11部をはさんでのことであるが、このことの意味については後述する。この種の周到な組み込みや言及の集積によって、『続編』では『マリヤンヌの生涯』とのプロットの継続性が保証されている。

けれども、ドロップルの指摘のように、『続編』において、このプロットの継続性が明らかに破綻をきたしている箇所がみられる⁽¹⁰⁾。

Une cloche, qui appelait alors mon amie la religieuse à ses exercices, l'empêcha d'achever cette histoire, qui m'avait heureusement distraite de mes tristes pensées, qui

avait duré plus longtemps qu'elle n'avait cru elle-même, et dont je vous enverrai incessamment la fin, avec la continuation de mes propres aventures.

(*La vie de Marianne* Partie 11, pp.579–580.)

Je vous disais donc que, grâce au ciel, la cloche sonna, et que ma religieuse me quitta : je dis grâce au ciel, car en vérité son récit m'avais paru long : et la raison de cela, c'est qu'en m'occupant des chagrins de mon amie, je ne pouvais pas m'occuper des miens. (*Suite* p.586.)

『続編』は『マリヤヌの生涯』第11部とは明らかに矛盾している。すなわち、《Je vous disais donc que, grâce au ciel, la cloche sonna, et que ma religieuse me quitta (*Suite*)》と『続編』で言及されているように、確かに『マリヤヌの生涯』第11部の終わりで鐘がなって、修道女テルヴィールの物語は途中でやめられる《Une cloche, qui appelait alors mon amie la religieuse à ses exercices, l'empêcha d'achever cette histoire (*La vie de Marianne*)》。けれども、修道女テルヴィールの物語に対するマリヤヌの評価は、『マリヤヌの生涯』と『続編』では、はっきり異なっている。

『マリヤヌの生涯』においては、修道女テルヴィールによる身の上話、つまりテルヴィールが修道女になるまでの経緯は、未完ではあるが、マリヤヌの悲しみをやわらげる《cette histoire, qui m'avait heureusement distraite de mes tristes pensées (*La vie de Marianne*)》とともに、修道女になろうとする考えを思いとどまらせるものであった⁽¹¹⁾。だからこそ、発信者マリヤヌは「修道女物語」の結末と、自分の物語の続きを送ることを某夫人に約束しているのである。

けれども、『続編』の《Je vous disais donc que (*Suite*)》以下の文における、修道女テルヴィールの身の上話に対する評価は、『マリヤヌの生涯』第11部の終わりとは異なり、修道女テルヴィールの話が長すぎるため《car en vérité son récit m'avais paru long : (*Suite*)》、マリヤヌ自身の不幸がなおざりにされる《en m'occupant des chagrins de mon amie, je ne pouvais pas m'occuper des miens. (*Suite*)》と考えられており、『続編』ではこの箇所以後「修道女物語」については語られず、「修道女物語」の結末は放棄されることになる。

『マリヤヌの生涯』の引用箇所は、第11部の終わりであり、『続編』の引用箇所はマリヤヌの物語がはじまる直前の箇所である。先に述べたように、周到な言及の集積によって、『マリヤヌの生涯』と『続編』のプロットの整合性を保証しているリコボニ夫人が、もっとも目につきやすいこのふたつの箇所が、プロットの継続性のためにきわめて重要な箇所であることを見逃しているとは考えにくい。

この矛盾は、『続編』を『マリヤヌの生涯』のどの部分の続編とするかということを決定しな

なければならない制約によって、生じていると考えられる。すなわち、短期間に書かれなければならない『続編』は、長いものであっては都合が悪いことから、いわゆる「修道女物語」の結末は捨てられ、不実な恋人ヴァルヴィルとマリヤンヌの物語の続編にするという選択がなされる必要があった。このために、「修道女物語」（第9部から最終第11部）の結末を書くという11部での約束を破らざるを得なかったのである。こうして、先に述べたドロップルによる注で指摘されているような破綻が生じたのである。最終ページから実に157ページ前、つまり第9部から第11部の「修道女物語」ととばして『続編』が「マリヤンヌ物語」の続編になっているのは以上の事情による。したがって、『続編』は、『マリヤンヌの生涯』の第11部ではなく第8部の続編と考えなければならない。

リコボニ夫人は、読書過程で得た「修道女物語」の結末を書かねばならないという要請を、再創造のために犠牲にしている。ここにはプロットの選択という意志がはたらいてる、換言すれば、プロットのレベルで再創造がなされている。つまり、再創造が読書をつうじて獲得されたテキストを変形しているのである。

ドロップルは、『続編』において『マリヤンヌの生涯』の「修道女物語」がなんの役にたっていないこと⁽¹²⁾、さらに『続編』の最後にある、マリヤンヌと恋敵ヴァーソン Mlle Varthon の対決する場面は筋 action の展開になんの機能も果たしていない⁽¹³⁾、という疑問を述べている。

けれども、このドロップルの疑問から逆に、短期間のうちに『続編』を書いたリコボニ夫人の意図は、筋 action を進めることなく、マリヴォーによる「ヴァルヴィルとマリヤンヌの物語」を小さく切り取った形で模倣しようとするににあったと推測できる。疾走しているものの、一步たりとも前に進まないアルルカンのイメージによって『続編』をとらえたグリムは、まさに正鵠を射ていたのではあるまいか。《Si vous avez jamais vu Arlequin courir la poste dans je ne sais quelle farce, vous avez une idée très exacte de cette manière, qui consiste à se donner un mouvement prodigieux pour n'avancer d'un pas⁽¹⁴⁾》

3. モチーフ

「模倣」の場合、プロットのみならず、模倣されているテキスト『マリヤンヌの生涯』の様々なモチーフも、模倣しているテキスト『続編』によって、正確に引き継がれなくてはならない。つまり、パロディとは異なり、「平行移動」されなければならないが、『マリヤンヌの生涯』における重要なモチーフのひとつに、呼称のモチーフがある。これは、『マリヤンヌの生涯』のなかの、いわば「マリヤンヌ物語」に相当する第1部から第8部のみならず、「修道女物語」においても重要な機能をおびている。この呼称のモチーフは、このふたつの「物語」を相互補完的関係におくことで、統一された『マリヤンヌの生涯』を成立させていると考えることができる。この相互補完性の問題と「修道女物語」における呼称の問題については、すでに他で論じているので⁽¹⁵⁾、本稿では

「マリヤヌ物語」と『続編』における呼称のモチーフを考察する。

マリヤヌは、幼い時に外国の貴族とおぼしき両親を殺され、自分の出自が不明のままであった。なんらかの手段、たとえば結婚によって貴族の姓を回復することがマリヤヌの生きる目標、換言すれば「マリヤヌ物語」という「冒険」les aventuresを推し進める動因となっている。貴族の出自であることを確信しているにもかかわらず、「マリヤヌ」という名前を与えられた彼女にとって、姓名は強迫観念となる。後に婚約者となるヴァルヴィルとの出合の例をあげておく。

M'en était-il moins difficile de lui [=a Valville] rester inconnue, comme c'était mon dessein? Non vraiment, car il m'offrait son carosse, il voulait me reconduire ; ensuite, il se retranchait à savoir mon nom, qu'il n'était pas naturel de lui cacher, mais que je ne pouvais pas lui dire, puisque je ne le savais pas moi-même, à moins que je ne prisse celui de Marianne ; et prendre ce nom-là, c'était presque déclarer Mme Dutour et sa boutique, ou faire soupçonner quelque chose d'approchant.

(*La vie de Marianne* Partie 2, p.79. 下線は論者による。)

Et d'où vient cela? C'est que j'ai si peu l'air d'une Marianne, c'est que mes grâces et ma physionomie le [=Valville] préoccupent tant en ma faveur, c'est qu'il est si éloigné de penser que je puisse appartenir, de près ou de loin, à une Mme Dutour, qu'apparemment il ne saura que quand je le lui aurai dit, peut-être répété dans les termes les plus simples, les plus naturels et les plus claires.

(*La vie de Marianne* Partie 2, p.82. 下線は論者による。)

貴族の出自であることを確信しているマリヤヌにとって、「マリヤヌ」という庶民を指向・照合する名前は、自分の本当の名前ではない《je ne pouvais pas lui dire, puisque je ne le savais pas moi-même, à moins que je ne prisse celui de Marianne》。仕立屋の女将、デュツール Mme Dutour ごとく下々の者たちの類に自分を不当におとしめ《prendre ce nom là, c'était presque déclarer Mme Dutour et sa boutique, ou faire soupçonner quelque chose d'approchant》、そこに縛りつける機能を果たしているのである。これに対して、マリヤヌの自意識においては、貴族の出自であることの確信はゆるぎない。なぜなら、自分には「マリヤヌ」という名にふさわしくない貴族性が生来そなわっているからである《C'est que j'ai si peu l'air d'une Maianne, c'est que mes grâces et ma physionomie le préoccupent tant en ma faveur》。こうして、他者によって与えられる呼称についての強迫観念が生じる。マリヤヌは、呼称に憑かれた人物なのである。

庶民の名を与えられたマリヤヌは、貴族の姓名と権利を回復しようとするものの、絶えずその名の示す社会的位置に押し戻されようとする。たとえば、第三者のまえでは、マリヤヌを貴族にふさわしい呼称で、*Mademoiselle* と呼ぶド・ミラン夫人とは対照的に、マリヤヌとヴァルヴィルの結婚に反対する、ヴァルヴィルの親族は次のようにいう。

Mademoiselle! s'écria encore là-dessus, d'un air railleur, cette parente sans nom ; mademoiselle! Il me semble avoir entendu dire qu'elle s'appelait Marianne, ou bien qu'elle s'appelle comme on veut, car comme on ne sait d'où elle sort, on n'est sûr de rien avec elle, à moins qu'on ne devine ; mais c'est peut-être une petite galanterie que vous lui faites à cause qu'elle est passablement gentille.

(*La vie de Marianne* Partie 7, p.327. 下線は論者による。)

この親族の言葉に多用されている中性人称代名詞《on》によって、貴族ならざる呼称「マリヤヌ」が刻印されている。すなわち、中性人称代名詞《on》は、この当時の社会における身分制度と呼称の機能を担っている抽象的な主体 *entité*、換言すれば共同幻想の主体を指向している。マリヤヌとその庇護者ド・ミラン夫人が闘っているのは、この《on》が表象している共同幻想の主体なのである。

庶民としての扱いは、「マリヤヌ」という名前だけではなく、『マリヤヌの生涯』において彼女を指示する言葉によって頻繁に繰り返されている。たとえば、マリヤヌを誘惑しようとしたド・クリマル M. de Climal は、拒絶されるや否や態度を一変させ、マリヤヌを《*Petite ingrate*》(*La vie de Marianne* Partie 3, p.122.) と呼び、次のように罵倒する。

Allez, petite fille, allez, me répondit-il, en homme sans pudeur, qui ne se souciait plus de mon estime, et qui voulait bien que je le méprisasse autant qu'il méritait ; je ne vous carins point, vous n'êtes pas capable de me nuire : et vous qui me menacez, craignez à votre tour que je ne me fâche, entendez-vous?

(*La vie de Marianne* Partie 3, p.123. 下線は論者による。)

『マリヤヌの生涯』において頻繁に現れる、《*petite fille*》という呼称のモチーフは、『続編』においても引き継がれている。まず、『マリヤヌの生涯』第8部において、マリヤヌの恋敵ヴァーソンが、ヴァルヴィルから聞いたマリヤヌの身の上話について悪意を秘めながら述べている箇所を引用する。

Ah ça! voyons! vous m'avez conté votre histoire, ma chère Marianne ; mais il y a bien de petits articles que vous ne m'avez dits qu'en passant, et qui sont extrêmement importants, qui ont pu vous nuire. [...] Cette marchande de linge chez qui vous avez été en boutique ; ce bon religieux qui a été vous chercher du secours chez un parent de Valville ; ce couvent où vous avez été vous présenter pour être reçue par charité ; cette aventure de la marchande qui vous reconnut chez une dame appelée Mme de Fare ; votre enlèvement d'ici, votre apparition chez le ministre en si grande compagnie ; ce petit commis qu'on vous destinait à la place de Valville, et cent autres choses qui font, à la vérité, qu'on loue votre caractère, qui prouvent qu'il n'y a point de fille plus estimable que vous, mais qui sont humiliantes, qui vous rabaissent, quoique injustement, et qu'il est cruel qu'on sache à cause de la vanité qu'on a dans le monde : tout cela, dis-je, dont Valville m'a rendu compte, lui a été représenté.

(*La vie de Marianne* Partie 8, p.391. 下線は論者による。)

『マリヤヌの生涯』におけるヴァルヴィルからの伝聞は、『続編』においては、ヴァルヴィルの生の声として描かれている。つまり、同じ事柄が、プロットの継続性を保証しながら、視点を変えて描かれているのである。

Était-il rien de plus humiliant pour moi que ce détail qu'il [=M. de Valville] avait fait à ma rivale [=Mlle Varthon]? Il me semblait lui entendre conter mes aventures ; j'imaginai le ton dont il disait à Mlle Varthon : Oui, je l'avoue, j'ai eu du goût pour Marianne, mais un goût passager, un goût qui fait honneur à ma façon de penser. Mettez-vous à ma place, cette petite fille se casse le cou à ma porte, puis-je ne pas la secourir? [...] je crois être amoureux, passionné même. Je vous vois, mademoiselle, je sens que je me trompais, que j'avais de la compassion ; voilà tout.

(*Suite* pp.586–587. 下線は論者による。)

これに対する、次のようなマリヤヌの反応から、『petite fille』という呼称がマリヤヌに与える衝撃をうかがい知ることができよう。

vous [=M. de Valville] ne serez point importuné de ses [de Marianne] larmes, vous n'entendrez point ses regrets, elle saura étouffer ses soupirs, cacher sa douleurs : *cette petite fille* vous paraîtra bien grande un jour.

(Suite p.587. イタリックは原文による。)

『マリヤンヌの生涯』におけるヴァーソンの言葉には、悪意が感じられる。《Cette marchande de linge chez qui vous avez été en boutique》とは、マリヤンヌが貴族ではなく、もともと、仕立屋の女将の家で働かねばならない身分の者であることを示している。しかもマリヤンヌは、単なる庶民ではなく、人々の慈善にすがらなくては生きてゆけない孤児である《ce couvent où vous avez été vous présenter pour être reçue par charité》。したがって、貴族ヴァルヴィルではなく、「とるに足りない」《petit》月給取りこそマリヤンヌにはふさわしいと結論される《ce petit commis qu'on vous destinait à la place de Valville》。《ce petit commis》は、形容詞《petit》を媒介として、マリヤンヌの呼称《petite fille》と対をなしているのである。

この呼称《petite fille》をめぐるモチーフは、『続編』において、さらにはっきり現れている《cette petite fille se casse le cou à ma porte》《cette *petite fille* vous paraîtra bien grande un jour》。以上のことからリコボニ夫人が『マリヤンヌの生涯』を読む過程において、このモチーフが重要であると読みとったことが理解できよう。

けれども、『マリヤンヌの生涯』と『続編』では、違いがある。すなわち、ドロップルの指摘のように、『続編』の《cette petite fille se casse le cou à ma porte》という「粗野な表現」《la vulgarité》は、マリヤンヌにはふさわしくない⁽¹⁶⁾。また、『続編』のほうが『マリヤンヌの生涯』にくらべて、全体的に感情がむきだしになっている印象を与える。その典型的な例がドロップルの指摘している文である。この箇所は、明らかにリコボニ夫人の文体、つまり独特のフラゼ phrasé（韻律・リズムとしての文）が用いられている箇所⁽¹⁷⁾以上に、本稿にとっては重要である。登場人物の変容が起きているからである。

リコボニ夫人によって、『マリヤンヌの生涯』のなかに読みとられた、ある局面におけるマリヤンヌの内面、つまり、嫉妬の感情、不実な恋人に対する恨みは、この局面を異なる視点から再創造する過程で変形をこうむり、粗野な文体によって描かれている。その結果、この言葉を発している主体マリヤンヌが、『マリヤンヌの生涯』で保持していた貴族的な優雅さ繊細さが損なわれている。同様に、マリヤンヌの言葉によって描かれるヴァルヴィルの貴族的な優雅さ繊細さも損なわれている。また、ヴァーソンにおいても同様に、次のような文体の変化によって、貴族的な優雅さ繊細さが失われている。

Il me laisse, lui? s'écria Mlle Varthon. Quelqu'un me laisserait? Que veut donc dire cette petite fille? Pour coup, je me sentis révoltée. Le nom de petite fille m'irrita : Sortez, mademoiselle, au nom de Dieu, sortez, lui dis-je ; cette *petite fille* a plus d'élévation que vous ; [...].

(Suite p.623. イタリックは原文による。)

以上のことから、リコボニ夫人が『マリヤンヌの生涯』を読むことによって生産された、マリヤンヌの心理の解釈、人物像の把握のしかたを、『続編』によって推測することができるのではなかろうか。ただし、『続編』は『マリヤンヌの生涯』を読む行為の結果であるとともに、再創造の結果であるからこの推測は近似値的なものにとどまらざるをえない。『続編』は、『マリヤンヌの生涯』の直接的な相関体ではなく、リコボニ夫人の読書行為と再創造の相関体としてのメタ・テキストだからである。

4. テキストと社会的コンテクスト

以上、読書行為と再創造の相関体としてのメタ・テキストの問題として、『続編』の主要な人物、マリヤンヌ、ヴァルヴィル、ヴァーソンの人物像の変容を考察したが、これとは異なる種類に属すると考えられる登場人物の変容がみられる。たとえば、サン・ターニュ伯爵 le conte de Saint-Agne である。ドロップルによれば、この人物は『マリヤンヌの生涯』においては、マリヴォーの親しい友人サン・フォワ Saint-Foix を思わせる。それに対して、『続編』においては、あたかもマリヴォーの「肖像」portrait のように描かれているという⁽¹⁸⁾。これは、『続編』における語り手マリヤンヌの置かれているテキスト構造が、『マリヤンヌの生涯』とは基本的に異なることに由来するのではなかろうか。このことを論じるために、『続編』の冒頭をふたたび考察する。

Vous voilà bien surprise, bien étonnée, madame : je vois d'ici la mine que vous faites. Je m'y attendais : vous cherchez, vous hésitez ; il me semble vous entendre dire : Cette écriture est bien la sienne, mais cela ne se peut pas, la chose est impossible! — Pardonnez-moi, madame, c'est elle ; c'est Marianne, oui, Marianne elle-même. — Quoi! cette Marianne si fameuse, si connue, si chérie, si désirée, que tout Paris croit morte et enterrée? eh! ma chère enfant, d'où sortez-vous? vous êtes oubliée, on ne songe plus à vous ; le publique, las d'attendre, vous a mise au rang des choses perdues sans retour.

A tout cela je répondrai que je ne m'en soucie guère : j'écris pour vous, je vous ai promis la suite de mes aventures, je veux vous tenir parole ; si cela déplaît a quelqu'un, il n'y a qu'à me laisser là. Au fond j'écris pour m'amuser, j'aime à parler, à causer, à babiller même : je réfléchis, tantôt bien, tantôt mal ; j'ai de l'esprit, de la finesse, une espèce de naturel, une sorte de naïf ; il n'est peut-être pas du goût de tout le monde,

mais je ne l'en estime pas moins ; il fait brillant de mon caractère : ainsi, madame, imaginez-vous bien que je serai toujours la même, que le temps, l'âge ou la raison, ne m'ont point changée, ne m'ont seulement pas fait désirer de me corriger. A présent, reprenons mon histoire.

(Suite pp.585-586. 下線は論者による。)

《cette Marianne si fameuse, si connue, si chérie, si désirée, que tout Paris croit morte et enterrée?》における、《cette Marianne》が指向・照合しているのは、第一義的には、この手記を書いたマリヤヌであろう。けれども、《cette Marianne》が実際に含意しているのは、死んだと思われていたマリヤヌではなく、かなり前に中断され、その続編はもはや書かれないとパリ中の人々が考えていた、イタリックの《cette Marianne》すなわち、作品『マリヤヌの生涯』である。手記を受け取っている某夫人に語らせているにしても、マリヤヌ自身に対する賛辞《si fameuse, si connue, si chérie, si désirée》は、度が過ぎている。また、人でありながら、物としてマリヤヌはとらえられているからである《mise au rang des choses perdues sans retour》。このように考えると、『マリヤヌの生涯』とは違って、『続編』の読者は、すでに『マリヤヌの生涯』を読んだ人々、《tout Paris》《on [=nous]》《le publique》として措定されていることが理解できる。この読者の措定は、テキスト『マリヤヌの生涯』がその第1部の冒頭で置かれていた位置、つまりレンヌの近くの別荘の戸棚から発見された「女性の筆跡で書かれた、数冊の手記」とは、まったく矛盾している。つまり、リコボニ夫人によるテキスト『続編』が置かれている社会的コンテキストそのものが、『マリヤヌの生涯』とは異なっており、それがテキスト『続編』に影響を与えていると推測できるのである。

『続編』の前に添えられている「リコボニ夫人の手紙」、「前書き」および『続編』というタイトルから、リコボニ夫人によるテキストの素性は、あらかじめ読者に知らされる。けれども、このタイトル等で示された、テキストが置かれている社会的コンテキストは、テキストが始まってなお、テキストのなかに密かに入り込み、テキストを規定している。『続編』は、『マリヤヌの生涯』の正当な authentique な続編としてのテキストではない。いわば、すなおに『マリヤヌの生涯』の続きを読むというコミュニケーションに加えて、テキストに、もうひとつのコミュニケーションが重なっているのである。以下この問題を具体的に考察する。

《si cela déplaît à quelqu'un, il n'y a qu'à me laisser là》『マリヤヌの生涯』と『続編』は、ともにマリヤヌが友人である某夫人にあてて書いた私信なのであるから、このようなことが起こりうるはずはない。ここでは、リコボニ夫人が『続編』を書くことが、社交界の「誰か」《quelqu'un》の気に入らないとすれば、ということに対してあらかじめ自己弁護がなされていると考えられる。つまり、マリヤヌ＝リコボニ夫人は、マリヤヌの声に自分の声を重ねること

によって、『続編』が置かれている、テキストの外にある社会的コンテキストについて言及しているのである。

《je réfléchis, tantôt bien, tantôt mal ; j'ai de l'esprit, de la finesse,》は、ドロップルの指摘のように、マリヤンヌの自分自身にたいする賛辞であり、確かに場違いな印象を与える⁽¹⁹⁾。けれども、この自己言及は、マリヤンヌというたぐい希な人物像を創造したマリヴォーに対する、リコボニ夫人からの世辞であるという機能も同時に果たしている。先に指摘した《cette Marianne si fameuse, si connue, si chérie, si désirée, que tout Paris croit morte et enterrée?》という自己賛美や、『続編』において、好感を与える人物として描かれているサン・ターニュ伯爵が、『マリヤンヌの生涯』とは異なり、サン・フォワではなくマリヴォーに似ているのも同様である。つまり、テキスト『続編』において、テキストの外にいるマリヴォーに対してメッセージが発せられているのである。『続編』は現実のコミュニケーションの場として機能しているのであり、マリヴォーが『続編』を高く評価した一因は、リコボニ夫人の巧みなコミュニケーションにあると推測できるのではなかろうか。

《il n'est peut-être pas du goût de tout le monde, mais je ne l'en estime pas moins ; il fait brillant de mon caractère :》この文における「私」《je》の発する声の機能もまた重層的である。この文は、第一義的には、マリヤンヌによる自分の性格にたいする自己言及である。それとともに、第一に、「私」＝マリヤンヌ＝リコボニ夫人によってテキスト外の人々、とりわけマリヴォーに対して発せられたメッセージ、お世辞である。つまり、「私」＝マリヤンヌ＝リコボニ夫人は、クレビヨン・フィス Crébillon fils のようにマリヴォーをよく言わない人々に対して、マリヴォーの手になる作中人物マリヤンヌを弁護している。第二に、リコボニ夫人の自己弁護と自己主張が密かに入り込んでいる。すなわち、「私」＝リコボニ夫人の手になる、続編のなかのマリヤンヌは、「すべての人々に気にいってもらえるわけではないだろうが」、「私」＝マリヤンヌ＝リコボニ夫人は意に介さない。なぜなら、『続編』のなかのマリヤンヌは「私」＝リコボニ夫人の性格《mon caractère》を「輝かしくしてくれる」ことを確信しているからである。

《ainsi, madame, imaginez-vous bien que je serai toujours la même, que le temps, l'âge ou la raison, ne m'ont point changée, ne m'ont seulement pas fait desirer de me corriger.》において、リコボニ夫人の自己弁護・自己主張がさらにはっきり現れる。自分は変わっていないと言っているマリヤンヌの声に、リコボニ夫人の声が重なっている。すなわち、「年齢」《l'âge》、「世代」《le temps》、「考え方」《la raison》の違いにもかかわらず、マリヴォーとリコボニ夫人の創造するマリヤンヌには、変わりがない《ne m'ont point changée, ne m'ont seulement pas fait desirer de me corriger》と言っているリコボニ夫人の声を聞き取ることができるのである。この声は、「私」＝マリヤンヌ＝リコボニ夫人は、誰もなしえないと考えられてた『マリヤンヌの生涯』を見事に模倣してみせることができる、と主張しているのである。

以上考察してきたように、『続編』において、『マリヤンヌの生涯』および『続編』を取り囲んでいるテキスト外の現実が、指向・照合されている。テキストは、テキスト内の空間を形成すると同時に、現実の社交界の空間を指向・照合し、両者は重なり合う。テキストは、社交界の人々に読まれることによって、いわば社交場と化すのであり、書簡体小説という文学テキスト空間は、個人的な書簡の空間と重なるのである。

このような現象が常にみられると考えることはできないであろう。そもそも読む行為自体が、読書をする主体や時代によって異なっているとすれば⁽²⁰⁾、文学テキスト空間が個人的な書簡の空間と重なるようなコミュニケーションの形態は、18世紀中葉の、それもフランス上流社会に特有なものであることを確認しておかなければならない。社会の変動につれて、読者が置かれている心的世界は変化する。したがって、テキストの読解行為と再創造というコミュニケーションの形態もまた、読解行為と再創造を担う主体が形成する心的世界に応じて、それぞれの様相を呈しているはずだからである⁽²¹⁾。

注

- (1) 佐藤文樹、「マリヴォーダージュ」(項目)、『フランス文学辞典』、白水社、1974年。
- (2) Chalet de Chamblain de Marivaux, *La vie de Marianne ; les aventures de madame la comtesse de*****, 1990, 《Cassiques Garnier》. 第一部、1731年刊行。第二部、1734年刊行。第三部、1735年刊行。第四部～第六部、1736年刊行。第七部～第八部、1737年刊行。第九部～第十一部、1741年刊行。
- (3) Cf. Frédéric Deloffre, note 2, in Pierre Chalet de Chamblain de Marivaux, *op. cit.*, p.583.
 および佐藤文樹『『マリヤンヌの生涯』の第十二部とリコボニ夫人』、『マリヴォー研究』、白水社、1987年参照。
- (4) 佐藤文樹、同上書、pp.116-119.
- (5) クリステヴォ、『記号の解体学』『記号の生成論』(セメイオケチ1・2、中沢新一他訳、せりか書房、1984年) 参照。
- (6) Madame Riccoboni, *Suite de Marianne qui Commence où celle de M. de Marivaux est restée*, in Pierre Chalet de Chamblain de Marivaux, *op. cit.*, pp.581-627.
- (7) この問題領域は、翻訳の問題領域にきわめて近い。翻訳になぞらえれば、言語内翻訳ということになる。起点言語が『マリヤンヌの生涯』であり、目標言語が『続編』に相当する。
- (8) リコボニ夫人の『続編』は、実質的には『マリヤンヌの生涯』の第7と8部の続編であるが、『続編』の最初の数行は、『続編』の直前に位置する第11部の文体を模倣している。

- (9) メタ・テキストとしての模倣という観点から、先に述べた『マリヤンヌの生涯』と『続編』におけるマリヴォダージュ、つまりは、リコボニ夫人によるマリヴォダージュの読解行為を論じることができると思われる。さらに、この問題領域をより正確に扱うためには、マリヴォダージュを、マリヴォー自身、リコボニ夫人、当時の人々、現在の人々といったさまざまなレベルにおいて検討しなければならない。つまり、マリヴォダージュとメタ・テキストを社会的・歴史的・文化コードの問題領域において記述し考察することである。

- (10) Frédéric Deloffre, *op. cit.*, note 1, p.586. 《Ceci est en contradiction avec ce qu'on a lu à la onzième partie : son histoire... qui m'avait heureusement distraite de mes tristes pensées》

- (11) 「修道女物語」の『マリヤンヌの生涯』における重要な機能のひとつが、マリヤンヌの修道女になろうとする望みを諫めることである。Frédéric Deloffre, *op.cit.*, note 1, p.588. および、佐藤文樹前掲書 p.107. 参照。

そもそも、『マリヤンヌの生涯』を回顧しながら物語っているマリヤンヌ Marianne rétrospective は、聖職者（修道女あるいは修道院長）ではなく、某伯爵夫人である。したがって、プロットの整合性上、マリヴォーは「修道女物語」によって、マリヤンヌが修道女になることを阻止する必要があったはずである。けれども、『続編』においてはこの点は考慮されていない。

- (12) Frédéric Deloffre, *op. cit.*, note 1, p.588.

- (13) Frédéric Deloffre, *op. cit.*, note 1, p.626.

- (14) Grimme, in *Correspondance Littéraire*, 1er mai 1765, tome VI, pp.275-276.

- (15) 遠藤真人、「マリヴォーの『修道女物語』における危機 — 呼称と身体 —」、『危機を読む — モンテニュからバルトまで —』伊地智均監修、1994年、白水社、pp.209-226.

- (16) Frédéric Deloffre, *op. cit.*, note 2, p.586.

- (17) Frédéric Deloffre, *op. cit.*, note 1, p.595.

- (18) Frédéric Deloffre, *op. cit.*, note 1, p.593.

- (19) Frédéric Deloffre, *op. cit.*, note 2, p.595.

- (20) Voir, *Pratique de la lecture*, sous la direction de Roger Chartier, Editions Rivages, 1985.

日本語訳として、『書物から読書へ』水林章、泉利明、露崎俊和 訳、みすず書房、1992年を参照した。

- (21) 続編の問題のみならず、模倣、パロディー、翻訳などは、テキストとメタ・テキストを媒介とするコミュニケーションの社会的、歴史的な問題領域に属している。

L'acte de lecture et la re-cr  ation dans le roman   pistolaire du dix-huiti  me si  cle

— *La Vie de Marianne* de Marivaux et sa *Suite* par Mme Riccoboni —

Masahito ENDO

Ecrire la suite d'une   uvre suppose deux actes : l'acte de lecture et la re-cr  ation. En retra  ant ces deux actes chez Mme Riccoboni dans sa *Suite    la Vie de Marianne*, nous esp  rons mettre en relief certains aspects caract  ristiques du syst  me de communication linguistique dans le roman   pistolaire au dix-huiti  me si  cle.

Pour ce faire, nous travaillons sur la comparaison entre ces deux textes ; par ce qui est identique et homologique, il est ais   de reconna  tre ce qui rel  ve de l'acte de lecture, acte m  talinguistique, et de mani  re presque inverse, par ce qui ne l'est pas, nous reconnaissons ce qui rel  ve du processus de la re-cr  ation chez Mme Riccoboni.

Etant donn   que l'enjeu de la *Suite* consiste    imiter au mieux *la Vie de Marianne* de Marivaux, il n'est pas   tonnant qu'au niveau du style, de l'intrigue, des motifs et des personnages ces deux textes soient identiques et homologiques. Ces ressemblances rel  vent de l'acte de lecture.

Dans les diff  rences entre les deux textes, nous constatons ce qui rel  ve de la re-cr  ation. Ainsi,    la voix de Marianne narratrice se superpose la voix personnelle de Mme Riccoboni, s'infiltrant dans la *Suite* pour y ouvrir un espace de communication sous-jacent, ou sont adress  s par exemple des messages personnels    des lecteurs bien particuliers, tels les compliments adress  s    Marivaux. Nous comprenons que la *Suite* n'est pas une imitation pure et simple de *la Vie de Marianne* ; la *Suite*, roman   pistolaire, fonctionne comme une vraie lettre personnelle.

En rep  rant ainsi le processus de l'acte de lecture et la re-cr  ation, nous pouvons mieux comprendre deux aspects du syst  me de communication linguistique dans les romans   pistolaires du dix-huiti  me si  cle. L'acte de lecture, d'une part, permet de d  finir le mode de communication particulier au roman   pistolaire du dix-huiti  me si  cle.

La re-cr  ation, par ailleurs, nous permet de constater que les fronti  res entre fictif, r  el et personnel sont tr  s ambigu  s. Etant donn   que cette sorte de communication linguistique se trouve rarement dans les romans d'autres si  cles, nous pouvons supposer

qu'il s'agit bien là d'une caractéristique propre au roman épistolaire du dix-huitième siècle.